

チャプレン・オン・ザ・ピート
教誨師、泥炭の上。

A Chaplain on the Peat 0304

第三部

第四話

泥炭に火放つ者

.....

第四話 泥炭に火放つ者

立地条件と専有面積を考えただけで庶民には十分うんざりされそうな、都心のとある賃貸マンションの一室。日没までにはまだいくらかの間があったが、明かりを消したままの室内はだいぶ薄暗くなっていた。その物音もろくにしないリビングには女が一人、ずっとソファに座ったまま、考え事をしている。右肘を肘掛けに乗せ、その指先で自らの頬を支える姿勢のまま、じっとしている。

女はあるいは、何事も考えていなかったのかもしれない。ただじっと、何かを待っているだけだったのかもしれない。

女の背後には、それなりの長さの廊下に繋がる扉があり、その廊下の突き当たりには、ありきたりの玄関の扉がある。

その玄関のドアノブが回る音と、ドアが開くかすかな音がして、小柄な人影が姿を見せた。

一人ではなく、二人いた。

女は、ぴくりとも動かない。

ただリビングで、待っていた。

やがて、リビングの扉が開く。

「お帰り。」

振り返りもせず、女はそう、中国語で言った。

「劉蓉、ごめんなさい。うまくできなかつた。」

少女の一人がそう、おずおずと、中国語で言った。

「いいのよ。いいの。あなたたち、よくがんばったわ。」

劉蓉と呼ばれた女はそう言って立ち上がり、振り返りざま、二人の少女のこめかみを連続して蹴り飛ばした。右足の甲で一人目を、体を翻しつつ、左足の踵で二人目を蹴っていた。滑らかで軽やかな動きとは裏腹に、意外なほど重たい音が室内に響く。

少女達の体が僅かな時間差で吹っ飛び、薄暗いリビングの壁に激突する。そこには、同じように暴力を受け、そのままじっと息を殺していた、あと四人の少女がうずくまっていた。

「あなたたち、よくがんばったけれど、負けは負け。作戦を指揮した私に負けをつけたのは、あなたたちよ？分かつてる？」

少女達は小さな声で返事をした。当然、女　劉蓉が責め立てる。

「声が小さいんだけど？」

口調はふつうだが、足先が数度翻り、一番重傷だったはずの、帰宅したばかりの緑と青をさらに痛めつける。最後に、再び壁に向かって思い切り緑を蹴り飛ばそうとしたところで、ソファに転がしておいた携帯電話に着信していることに、劉蓉は気がついた。

「ふん、」

興を削がれ、さもつまらなさそうに携帯電話を手取る。

「暢気に電話なんかかけてて大丈夫なの？」

名乗りもせず、誰もせず、ぶっきらぼうな台詞を投げつける。

「そうだな、こっちも多少焦臭くなってきてはいる。近々、そちらへ入国するぞ。」

「別にいつ来てくれてもかまわないけれど。ただ、今日の結果だけ、失敗よ。公安か警察の中に手練れが二人いた。妹たちは全員回収したけれど。」

「何？状況を話してみろ。」

「そうねえ、君坂を抑えた二人を格闘戦で制圧した上で、銃弾をそれぞれ一〇発近く撃ち込んだ。問答無用でね。しかも、妹たちが動かなくなってから、心臓と肝臓に撃ち込んだ。」

「対鬼神戦対応者がいたということだな？」

「そういうことだと思うわ。それと、妹たちのダメージから考えて、弾丸にも細工があったはず。」

「弾丸は回収できなかったのか？」

「ええ。大半貫通してたし、回収する余裕もなかったわ。体内に残ったものも、そのままと動けないって言うからね……。いずれにしても、持ってきてもうちじゃ分析する手立てがないわ。」

「そうか。……おそらくは魔弾だな。」

「魔弾、ね。対策は？」

「聖別された弾丸にせよ銀の弾丸にせよ、結局は体内にあることが一番問題だ。娘たちに気功でもやらせて、瞬時に排出できるように訓練しておけ。」

劉蓉の口元に、俗悪な笑みが浮かぶ。オープンキッチンのシンク下に隠してある拳銃を取り出す。元々非常時用だから、弾丸は装填されている。サイレンサーも取り出し、携帯電話を耳と肩とで挟みつつ、手際よく銃身に取り付ける。

「そんな練習、妹たちに弾丸撃ち込んで練習させるしかないじゃない？」

笑いながら、銃口を、怯えてひとかたまりになっている少女達に向ける。

「気をつけるよ。消音器があっても、至近距離だと弾丸は貫通して床や壁に穴を空けるぞ。音も出る。」

「……」

一つ舌打ちをすると、劉蓉は銃を置いた。

「ご忠告どうも。」

「それで、その手練れだという二人のことだが。」

若干の間の後、電話の声は尋ねた。

「どっちも女だったわ。線の細い感じの。」

「若い女、ということか？」

「たぶんね。」

ふむ、と電話の向こうの男は考え込むような間を作り、己の推測を口にした。

「それは、警察でも公安でもないな。中心のメンバーか関係者だろう。中心は、対鬼神戦の備えどころか、自ら鬼神を使うというからな。娘たちの封印を移しておいて正解だった。」

「そう。それじゃひとまず、中心を引きずり出すって辺りまでは、我々も成功したわけね。」

「そうだ。春以来の騒動も、都知事襲撃の話も餌に過ぎない。中心を引きずり出し、弱体化させ、それを手みやげに」

「父さん、その話はもう、聞き飽きたわ。今の私には、今日の作戦の雪辱の方が大事よ。」

父さん、電話の相手をそう劉蓉は呼んだ。その父はカラーズを娘たちと呼び、劉蓉は妹たちと呼んだ……。

「そうだな。雪辱のポイントは簡単だ。中心のアジトを叩け。どこでもよい。相手が体勢を組み立てる前に叩け。そのまま泥沼の膠着戦に持ち込めれば、お前たちの勝利だ。」

「なぜ？」

「言っただろう？遠からずこの劉黄綺がそちらへ行く。もちろん手ぶらではない。準備の進んだあれを携えてな。」

その言葉を聞いて、劉蓉の顔には一瞬、不満げな表情が浮かんだ。

「そういうこと？なら、さっそくアジトってやつを探してみるわ。まあ別に、そんな危なげなものに頼らなくても、うちの有能な妹様たちが何とかするはずだけれどね。」

劉蓉の台詞は、妹たち　カラーズへの期待から出たものではない。次を失敗したらまた痛めつけてやるという、冷酷な宣告だ。カラーズはだから、いっそう怯えた。劉蓉はその様子に、満足げに微笑んだ。

「それでは、こちらも出発を早めることとしよう。隣の県で劉家のことを探っている妙な女がいるというので、そいつを片づけてからと思っていたが。それよりも、」

「日本で暴れた方が楽しそう？」

電話では見えないから、ということなのか、思い切り皮肉っぽい笑みを劉蓉は浮かべた。

「ああ。そうだ。」

「じゃ、詳しくはこっちに来たときに。」

「そうだな。……ところでお前、大使に気取られてはいないだろうな？あれでどうして、抜け目のないところもある。」

「大丈夫よ。そもそも私みたいな下級官吏をあの尊大な大使様が気になさるとでも？」

「いや、外部から照会があったときに、真つ先に疑われるのは、我ら劉の家の者だ。」

「大丈夫よ。何も証拠は残していないし、現場から尾行されるようなこともないはず。今日休んだのも、いつも通りの休暇扱いよ？」

「ならばよいが。ただし、中心が出てきたのならば、この先油断はするなよ。CCLすら、相手に回して引かない連中だ。電腦戦もやるという。」

「分かってるわよ。だからこそ、なんでしょ？」

「ああ。だからこそだ。それではな。」

「ええ。ま、道中お気をつけて、お父様。」

「ふふ、そうだな。せいぜい気をつけるとしよう。」

父親のその言葉を最後に、二人の通話は終わった。

「しかし、今回は公安も教誨師ちゃんチームにすっかり持ってかれてたねえ。」

昭和記念公園での都知事襲撃事件当日の午後、都心のとある裏通りに、一台のインプレッサが停まっていた。場所がよければ六本木ヒルズのタワーが近くに見える、麻布の外れとでも言える辺りだ。

助手席の男の言葉に、運転席の男が応えた。

「……まあな。この尾行だって、例の新型の発信器を青木がセットしてくれたから失尾しなかつたようなものだ。」

「ふふん、その通り。で、どうする？」

「これ以上行けば、マンションの監視カメラに映るだろうな。車はまずい。ナンバー狙ってるはずだ。」

「降りて歩くか？」

「いや、やめておこう。わざわざこちらの顔を見せてやる必要はない。それより、あのマンションの賃貸契約を全部チェックした方がいい。」

「そうだね。そうしよう。オレたちはジェントルでクレバーなエージェントだからね。」

「それはどうだか分からないが、ひとまず発信器無効化しておくか。」

「そうだね、うわ、カラーズちゃん大ジャンプ、そうか、エレベーターも階段も使っていないだな。急いで無効化しないと室内入っちゃうぜ。」

「大丈夫、今無効化した。輝点消失確認……。まだ外か？」

「うん。マンションの外壁に取り付いている。たぶん、一二階辺りだ。」

「なら、地面に落ちたか通路に落ちるかだ。子どもが拾っておもちゃにする前に、誰かに回収させた方がいい。」

「了解。手配する。」

その言葉をきっかけに、インプレッサは静かに方向を変えると、いずこかへ走り去った。

同日、午後六時過ぎ。

相馬ひなの執務室には、教誨師相馬ひな当人の他に、青木はるみと吉田紗幸、そして時田治樹と森田ケイの四人がいた。ひなの執務室は相馬の屋敷でも北棟の二階、奥の中心部に位置づけられている。滅多な客人が足を踏み入れる場所ではなかった。

「ごめんなさいね。お父様が留守してるから、打ち合わせはここでよろしい？」

「こちらこそ、相馬のお嬢様のお部屋に入れていただけるとはなんてね。」

時田が、いつも通りの軽い調子で言う。

「そうですね。無断で入れれば無事では帰れない場所ですものね。」

涼しい顔で青木はるみが言う。隣に立つ吉田紗幸が、かすかに不穏な笑みを浮かべる。

「それで、カラーズ使いの女、身元は分かったの？」

女性たちの迫力に僅かに首を竦めた時田に対して、教誨師が問う。

「もちろん。劉蓉、二四歳。中国大使館付きの事務官だ。文書の翻訳業務等の担当らしい。」

「表向きはってこと？」

「いや、あの国は宗教排除国家でしょ？そういうポストは表にも裏にもないことになってるから。」

教誨師の率直な疑問に、時田が少し難しい顔をして答える。判断材料が少ないことは確からしい。

「じゃあ、結局組織的な動きか、個人的な暴走かは不明ってこと？」

「今のところはね。この辺は専門家の九条たちの現地調査に期待するしかない。連絡はすでにしてある。向こうがいつ読むかは分からないけどね。」

「メール？」

「いや、指定された術具の上に手紙を置いておくと、定期的に向こうがチェックしてくれるっていう便利なオカルトメディア。」

「そっか。まあ、どっちにしてもカラーズは式神モドキで中国系の出自、ということとは間違いないって感じね。」

「そうなるね。」

「コスプレしてる理由って、何かあるのかしら。」

「さあ、それは。ただ、ネチズンたちを煽動する、あるいは少なくともその世界で目立つにはもってこいだったのは確かだよ。それに、劉蓉はそもそも日本の大学に留学経験がある。そのときにカブレたか、利用可能だと思ったのかは分からないけれど、サブカル系にも造詣が深

「可能性は考えられるね。」

「ふーん。」

推測に基づく時田の話に、教誨師は考え込みつつも気のないような返事をした。

「センターは、どう動かれますか？」

青木が尋ねる。

「結局、知事殺害が主目的ではないことははっきりしたけど、現状それだけだからね。」

うん、と教誨師が頷く。

「知事殺害がほんとの狙いだったら、あのとときとつくに殺してるもんね。」

「そーゆーこと。だから、ここは少し考え方を変える。」

「？」

時田の言葉に、森田以外の人間が疑問の表情を浮かべる。

「相馬さんにはすでに了解を得ているけれど、やつらが食いつきそうな情報を流し、釣る。」

「どんな情報？」

「センターの霊能戦担当のアジト情報をでっち上げるのさ。おそらく連中は、今回の作戦での教誨師ちゃんたちの動きから、センターの関与を疑うはずだ。あんな芸当ができるのは公安じゃない。組織壊滅後の日本では、センターくらいのもものだからね。他は、スキルはあっても公安と共動するとは思えないし。」

「つまりそれは……、」

「そう。カラースの狙い、あるいは狙いの一つは、我々センターだろうと踏んで動いていくということだね。」

「カラースの狙い、読み違えはない？」

教誨師は、腕組みをした。

「違っていてもいいのさ。むしろセンターを狙うように誘導するということだよ。」

黙っていた森田が口を開いた。

「今回の件、連中には失策だ。作戦自体はまだしも、撃いできたネチズンの支持が揺れている。過半数は離反するかもしれない。そこで派手なキャンペーンが必要になる。」

「餌をチラツかせれば食いつきやすい状況、ということか。」

そのとき、執務室のドアがノックされた。吉田がドアを開けると、現れたのは相馬嶺一郎
教誨師の父親にして、センターの上級幹部の一人であった。

「お父様がこちらにいらっしやるなんて。」

ひなを含め、全員が立ち上がる。嶺一郎は皆を押し留めるように右手を挙げたが、いずれにしても追加の椅子を持ってこないと言席が足りなかったのだ。ひなの隣に嶺一郎を案内し、新しい席には紗幸が座った。

「すまん。先ほど、某所で杉田と話をしてきてな。急ぎその結果を伝えたい。」

「杉田様、お忙しかったでしょうに。」

青木が訊くと、嶺一郎は事情を説明した。

「向こうから、五分でいいからと連絡をしてきたのだ。」

「なるほど。」

「それでな。杉田から提案があった。」

皆が嶺一郎の次の言葉を待つ。嶺一郎は、なぜかにやりと笑った。

「公安は、対カラーズ戦での餌を付け替えたいそうだ。都知事の方はお役御免、次の餌は、センター、そして、チーム・チャブレンだという。」

一同は、顔を見合わせた。そして、やはりなぜかにやりと笑ってしまった。

「……お父様、あたしたちもそれを今ちようど話していたところでした。」

「ああ。それについては俺も同じ考えでな。杉田には事後に通告でもよいかと思っていたのだが。杉田は、その辺りを見越してわざわざ俺に言ってきたというところだろう。先手を取つてな。」

「先手？」

教誨師は嶺一郎の言葉の意味がピンと来なかったようだが、青木は嶺一郎に向かって微笑んだ。

「確かに、先手ですわね。」

「ああ。いかにも杉田らしい提案だろう？……どのみち、現状で餌候補として有力なのは、センター、および今日派手に活躍してくれたチーム・チャプレンだ。それを公安が、わざわざ餌指名してくるということは、」

「ふふふ、そっか。」

「……そうだ。これ以上のバックアップがあるか？」

教誨師は、教誨師というよりも相馬ひなの表情でもって笑い声を上げた。

「ないわね。ほんと杉田さんて、なんて言うのかしら、」

「ツンデレ課長。」

「ぼそり、と紗幸が答える。」

「そう、それぞれ。」

軽くではあるが両手を叩くようにして、ひなはさらに笑った。

「なんだ、そのツンデレっていうのは。」

嶺一郎が真顔で尋ねる。

「後ではるみさんにゆっくり聞いて。」

「はるみ君がそうなのか？」

「違います。」

青木がなぜかむすつとした表情で応え、時田と森田はさすがに微妙な表情を浮かべた。

「ともかく、餌でも何でも構わないけど、次で決着を着けられるだけの準備が要るわね。」

自分で場を緩ませてしまった自覚はあるのか、教誨師は話を先に進めた。

「あの、シルバーの件ですけど、」

少しおずおずとした様子で紗幸が手を挙げる。

「貫通せず、体内で炸裂するような弾丸は作れませんか？せつかくの抑止力も、貫通してしまうと軽減してしまうようですので。」

「セフティ・スラッグのシルバー版があればいいということだな。」

森田はそう応じつつ、時田の顔を見る。

「それはセンターの部門に頼んでみるよ。少し時間はかかるだろうけれど。」

全員が頷く。

「後は、鬼斬りの実戦投入ですが、」

青木が発言すると、教誨師は軽く頷いた。

「この前は無人島だったからよかつたけれど、今回は都心でのバトルになるかもだしね。」

「街場向けの迷彩方法を検討いたします。」

「その前に、おばさまにお願いして借り出さないといけないけれどね。」

作戦の打ち合わせは、子細に渡った。嶺一郎は時折方針を確認するような発言を行うだけで、特段の指示は出さなかった。皆、実戦の戦闘員としての十分なブリーフィングを行い、戦いへ

の備えを進めた。

やがて、時田と森田が屋敷を辞し、青木も紗幸も慌ただしく日常の役目に戻った。

嶺一郎とひな、親子だけの時間が一瞬、できた。ひなは立ち上がり、考え込むような表情でソファに腰を下ろしたままの嶺一郎と向き合った。親子は、何か気まずそうな空気も漂わせながら、向き合っていた。

「杉田のやつだがな。」

「ええ。」

「あいつ、この作戦で敗北すれば、辞職するぞ。」

「……それじゃ、よけい負けられないじゃない？ま、負ける気はないけどね。」

「強気だな。」

「お父様もでしょ？」

微笑みを浮かべる娘に対し、父親はむしろ、表情を引き締めた。

「……実はな、叔母上から、太刀小太刀を預ける旨、すでに連絡をいただいている。小太刀は、吉田に持たせよとのことだ。」

「分かったわ。気を引き締めてかかる。」

教誨師がそう答えると、嶺一郎は、少し困惑したような表情になった。

「……」

「何？」

「いや、本来なら、いたわりの言葉でもかけるべきところなんだろうが。」

嶺一郎は、娘の顔ではなく、あらぬ方向　隣室に続く扉の方に視線をさまよわせつつ、そう言った。

「お父様、そのお気持ちはうれしいけれど。でも、事が済んでからの方がうれしいかも。今はブレずに、この戦いの行方を定めたい。」

「そうだ、な。」

そう言って、嶺一郎は何か気づいた顔になって、娘の方に顔を向け直した。

「何よ？」

「……いや、お前まだ、俺の言葉でブレたりするの？」

娘　相馬ひなの顔が少し紅潮する。

「う、うるさいわね、しょうがないじゃない、ただ一人の肉親なんだから。変に心配されるとやりにくいってだけよ。」

「そうか……。ところでさっきの、なんだったか、ああ、ツンデレだったか。」

「うるさいです！とつとと南棟へ戻ってくださいお父様！」

「分かった分かった。」

そう独り言のようにつぶやき、立ち上った。そして、ひなの執務室を出て廊下を歩き始める

と、また一言、

「全く、女の気持ちというのはよく分からんな。」

そうつぶやいた。

それが、もしかすると娘にも聞こえたのかもしれない。いや、確実に聞こえていたのだろう。背後から、部屋の入り口まで見送りに来た娘の声が飛んできた。

「お父様ははるみさんを泣かさないようにしてればそれで十分です！」
ずばん、というように執務室の扉が閉まった。

誰もいない廊下で嶺一郎は立ち止まり、ゆっくりと振り返ると、その扉に向かって頭を下げた。

こうして、昭和記念公園事件の当日のうちに、戦いの新しい布陣は定まった。父は娘を餌とし、娘は自ら餌となるべく志願した。

戦いの日々の一日目は、こうして終わった。

明けて、木曜日。世間はまだ、都知事暗殺未遂という事件に動揺していた。朝刊で初めて事件を知った者も多くいたに違いない。

「どもー、宅配便です。」

午前一〇時、センターの高田馬場オフィス。モニターには、スーツ姿の女が映っている。あからさまに宅配業者には見えないんだけど、と時田は苦笑を浮かべつつ、インターフォンのマイクに向かって応えた。

「はいはい、今開けるよ。」

そして立ち上がると、地味なオフィスの入り口に向かった。地味なはずだ。現在は、北関東にある自動車関連の部品製造業の会社が東京に置く事務所、という様子に偽装してある。

ドアを開けると、立っていたのは結城舞、データでは警察庁警備局公安課所属のハツカーのはずだ。時田とは旧知の吾妻ルカの、部下または後輩にあたる。

「どうも。今日はお手数おかけします。てつきりルカねえさんが来るかと思ってたんだけどね。」
いつも通りの調子で笑顔を浮かべて、時田はそう声をかけた。

「ルカさんは杉田さんのお供で外回りです。ルカさんもそろそろいい歳だから社会勉強しろってことみたいですね。」

結城の方も、思いつきり笑顔でそう言った。

「くつくつく。ねえさんもある意味お嬢様だからねえその辺は。あ、ごめん、立ち話してる場合じゃなかった。さ、中へどうぞ。」

「はい、おじゃまします。」

ロッカー等が並べられ、狭い通路状になった入り口部分を抜けると、それなりにスペースの

あるオフィスがあつた。だがそれも、ごく当たり前の事務所、という見た目だ。

「結城さん、でいいんだよね？」

椅子を進めつつ、時田が確認する。

「はい、えつと、時田さん、でよろしいんですよね？」

「はい、時田です。よろしく。ってなんでにやにや？」

待つてましたとばかりに、結城の表情が明るく輝く。

「一時期、うちの長谷川のストーリーカーだつて噂されてましたけど？ 実際のところはどうなんですか？ お好みはああいうフェロモンだだ漏れなタイプ？」

会つて早々遠慮のない結城の様子に、さすがの時田も多少はたじろがされた。

「げっ、何でそんな、ああ、あのときの尾行やらがバレてたのか。まあ、あれも仕事のうちだし、確かにストーキングはしたがストーリーカーじゃない。ってそれ、姉さんも長谷川さんも知つてるの？」

「当然知つてます。お仕事なんだろうなというのも含めて。ただ、時田さんの名誉のために申し上げると、最初はこちらにも気づいていませんでしたし、サイバー班の人間と課長以外は今でも知りませんよ。」

「ん？」

背後にある事情を推測してか、時田の視線が一瞬険しくなる。

「サイバー班の副業というかで、ネットワーク型の超小型監視カメラ増設してるんですよ。庁内にも割と内緒で。まあ、庁舎警備用のカメラ以外にもカメラがあるってことですね。」

笑いながら、結城があっさり機密に近いはずの情報を告げる。

「定期的に警備にレポート上げる必要は一応あるんですが、そのときには、課長の許可の下、吾妻さんが身元を適当に誤魔化して処理してましたけど。当時とは状況も変わりましたし、今は欲しい情報は直接言ってください。」

時田も、これには笑うしかなかった。

「やられたな。でもほら、直接お願いすると、そういうの全部借りてことになるでしょ？」
「大丈夫です。杉田が課長の間はたぶん。直接どうぞというのも杉田からの伝言ですので。さて、今日のお仕事ですが。」

「うわ、言いたいこと言うだけ言っでとつと切り替えたなこいつ、と思いつつ、時田は概略の説明を始めた。時田とて、仕事が速い人間は嫌いではない。

「そうだね、要は、意図的に情報漏れを演出したいんだ。現状センターのサーバは中を覗かれた形跡はないけれど、アタックは頻繁に受けている。もちろん、中を覗かれたって、ネットにつながってる端末にはろくな情報は入っていないんだけど。」

「まあ、そうでしょうね。」

「で、それをセキュリティ上の事故か何かに見せかけて、ちょっとだけ内部情報が見られるよ

うに細工して欲しいんだ。もちろんこれは、情報漏洩に見せかけた情報操作なので。ターゲットが情報を確認すれば、そこはまた塞いでほしいんだけどね。」

頷きながら、結城は少し考え込む表情になった。

「了解しました。それじゃ、……そうですね。データベースサーバの更新時のミスで、新規情報が外から見えるようになってしまっていた、数時間後に気づいて元に戻した、くらいのストーリーでどうですか？」

「うん。そうだね、それでお願い。」

「了解です。少し面倒なのは、見せたいデータと見せていいデータ、絶対見せてはいけないデータの識別くらいですが、それは？」

「一応決めてあるよ。対象に見てもらいたいダミーのファイルも、ざっくりだけどさつき作っておいた。後でそのファイル自体も見てもらえるかな？」

「了解です。」

「それから、対象が利用する可能性のあるIPのリストもあるけど、代理通されても特定できる？」

「大丈夫です。それは各方面には内緒で長谷川里香子お姉様謹製のいけないツールを設置します。該当IPから叩いてくれば、画面にアラートが出せますよ。他には？」

「ん、そうだね、とりあえず今は特にないかな。」

「了解です。その条件なら、一応このシステム確認させてもらうのに一〇分くらいいただくかでもすけれど、それを入れても一時間以内で設定できますよ。設定解除もクリック二つくらいでできるように仕込んでおきます。時田さん一人でも対応可能な方がいいですもんね。」

「ありがとう。分単位で急いでるわけじゃないけど、情勢的には今日のうちに垂れ流したい情報なんでね。助かるよ。」

「分かりました。じゃさっそく。」

「よろしく。」

テンポよく話がまとまったため、互いに少し安心したような空気になる。

「そうそう、そろそろお茶菓子が届くはずだけど、お茶は何かいい？って言っても見たとおりで。コーヒーか紅茶くらいしかないよ。しかもストレートかミルクティー。」

ちょうどそのとき、来客を告げるブザーが鳴った。来客とは言っても、入室のIDを持つ人間のようだ。入口の方から、ドアの開閉音に続いて足音が聞こえてくる。

「お、お茶菓子が来た。どうせチョコプレートか何かだろうけど。」

「いや、チョコプレートだけじゃないぞ。……ん、そうか、結城さんだったか。」

入室してきたのは森田ケイ、時田と組んで動いているセンターのエージェントだ。結城とは、品川事件のときに共に作戦に参加している。

「どうした？」

「いや、ルカが来るかと思ってたもんでな。湖池屋のポテトチップスを買ってきたんだ。」
珍しく少し困った様子の森田に、結城が言う。

「のり塩ですか？」

「ああ。」

「ルカさんで、愛されてるんですね。」

「それはない。」

時田と森田が同時に応えた。それを聞いた結城が大笑いする。

「森田は気が利くけど、それは相馬家の仕込みがよかったからさ。元執事の気質が抜けてないだけだと思うよ。」

うるさい、という答えを表情だけで森田は示した。時田はちょっとだけ済まなそうな顔をして、状況を説明した。

「姉さんは杉田さんについて外回りなんだとさ。」

「……確かにそろそろ、そういう歳だな、あいつも。」

この森田の台詞に結城はくくくと笑った。

「やっぱり愛されてますねえルカさん。三人は古くからのお知り合いだったんでしたっけ？」

「ん、ああ、そうなるね。イギリスでの研修時代だからだから、かれこれ、ええと、何年だ？」

「……済まないが、仕事の方は進めなくていいのか？和やかなのは結構だが。」

森田がそっけない態度で仕事の進行を促した。時田も結城も、それに笑って応じて仕事に取りかかる。

「そうだった。じゃ、お茶の方は森田に任せて、こっちはぼちぼち始めますかね。」

「はい、よろしくお願いします。あとあたし、」

「？」

「ミルクテイでお願いできますか？それと、ポテチも食べたいです。」

内心、元ではあるが本物の執事によるお茶のサーブにわくわくしていたこと、それは、結城舞だけの秘密だった。

「承知した。それから、一応その時田は結城さんがうちのサーバに変な仕掛けをしてくれないように監視する役目も担ってるから、気をつけた方がいい。」

「森田、それ言っちゃったら意味ないじゃん。」

結城がまた声を上げて笑う。

「いや、オレたちは一応役目を果たしたというジェスチャーが必要かと思ってな。」

「確かにね。何か仕掛けられても気づかないって可能性は十分あるもんね。ルカが引き抜いた腕っこきちゃんだもんね。」

「大丈夫ですよ。杉田の方針もあって、うちは欲しい情報があれば正規ルートで依頼しますから。」

澄ました顔で結城が言う。

「その依頼はどうせ事後に来るんでしょ？」

何か諦めたような表情でそう言う時田に向かってまた笑いつつ、結城は作業を開始した。必要な情報はすべて時田が提供しているとは言え、その手際は常時システムに触れているはずの時田にとっても驚嘆すべきものであった。作業は、結城の申告した時間よりも一〇分ほど早く終わった。

その日の午後遅く、秩父の相馬みさをから相馬の屋敷に電話があった。青木はるみに伝えることがあるという。

「みさをさま、お待たせいたしました。」

「青木、忙しいところごめんなさいね。ひなのことだけけれど、今日の様子はどうかしら。」

「お嬢様でしたら、今日はいつも通り登校され、夕方四時過ぎには帰宅されました。一応、嶺一郎様ご入院中、という建前ですが、その点は特に問題なく対応できたそうでございます。」

「わかりました。太刀小太刀は手元に渡っていますね？」

「はい。お預かりしております。」

青木はすでにここまでの会話で、相馬みさをの言葉に躊躇いや齒切れの悪さのようなものが

あるのを聞き取っていた。いつものみさをのしゃべりではない。何か、重大な用件があるような、そんな予感を得ていた。

みさをは、少し間を置いて、告げた。

「……吉田にも伝えて欲しいのだけれど、これからしばらく、ひなには苦しい日々が続くそうなの。でも、その苦しみの内容が、このみさにはまだ見えないのです。努々、油断せぬように。」

「かしこまりました。お嬢様には？」

「私からというのは伏せて、ともかく油断するなどだけ、伝えてもらいましょうか。」

「承知しました。」

「ひなのこと、頼みましたよ。」

「はい。お電話、ありがとうございました。」

青木には、今回の作戦、嫌と言うほどの気懸かりがある。

もしまたカラーズと教誨師たちがまみえることがあれば、今度はカラーズ側も教誨師およびアサシンをターゲットとして襲撃してくるだろう。背格好、スキルから、同一人物だと特定するのは容易い。だからこそその「餌」扱いではあるが、餌に対するガードは、相手が食いつく瞬間までは緩めておかねばならない。

果たして、敵がヒットする瞬間、ガードが一瞬二瞬遅れた場合、自分たちチーム・チャプレ

ンは持ちこたえることができるのだろうか。

そして、九条たちの帰国、戦線合流を待たずに戦いが始まったとき、誰が対カラーズ戦を組み立て、指揮するのか。

教誨師は、ひなお嬢様は、確かに鬼斬りの娘だ。しかし、鬼斬りは鬼斬りであるが故に、すべて実戦での戦果のみによってそう呼ばれる。トレーニングに協力してくれる鬼など、いるはずもないからだ。

いや、あの二一柱の式神たちならば、トレーニングくらいは付き合ってくれるかもしれない。しかしその鍛錬の成果が、今度の鬼、六人編成のカラーズという推定「混種」の少女達に通用する、という保証は一切ないのだ。鬼には当然ながら規格も標準もない。目の前の鬼は倒せても、次の鬼にはまるで歯が立たないかもしれない……。

可能ならば、水原環に陣頭指揮を取って欲しいと、青木は思った。あるいは、タイミングによつてはそれも可能なかもしれない。松本での、神契東天教の一件以来、センターと公安課、そして神社本庁は協力関係にある。神社本庁のエージェントである水原の助力も、得られるかもしれない。

しかし、今は、それができないのだ。

水原はその主たるフィールドである東南アジアを離れ、現在はロシア連邦の極東地域に潜入しているはずだという。近々、この極東地域を含む北東アジアのどこかで、全く新しいタイプ

の宗教指導者が誕生するという、本庁屈指の未来読みたちが示したという予言に対応するための調査偵察行動らしい。水原にとってはそうした探索こそが主務であるため、おいそれとは帰国もできない。きっと今は、少数民族のシャーマンを尋ね歩き、予言の信憑性を確認する作業に追われている……。

表向きは、公安もセンターも、そして相馬家も、平静を保っていたし、抜かりなく、戦いへの準備も進められている。

しかし、今聞いたみさをの言葉、一筋縄では行かない気がするという、嶺一郎の言葉、そして、何も語らずただ開戦を待っている教誨師・ひなお嬢様……。重圧というよりも、無味無臭で遅効性の毒物を盛られたような、あるいは室内の酸素を少しずつ減じられているような、徐々に増していく胸苦しさを、青木はるみは感じていた。

（最初に火を放ったのは、向こう。今度はこちらから仕掛け、連中を釣る、という考えでこっちは動いている。あたしらは、次の火を放つのはこちらだと思っている。だけど……。）

青木は気づいていた。相手、カラーズとその背後にいる者たちの次の手を、自分たちは何も知らないということ。公安の援護、武装の新調、チームの機能強化、そんな、一つ一つの積み上げをあっさり突き崩すような、レベルの違う作戦が展開される可能性はないのか……？（嶺一郎様もお嬢様も杉田様も、このことは含んで動かれている。そうでなければ、今回の作戦は理解できない。これではまるで、……。）

餌は、食われてこそ価値が生じる。その餌こそが戦力上の中心だというのは、戦術上、当然望ましいことではない。初手を誤れば、取り返しのつかない状況になることもあり得る。

玉碎覚悟の背水の陣、そんな不穏な単語を頭の中から消し去るようにして、青木は嶺一郎の部屋に向かった。数日ぶりのお召しがあったのだ。だが、内線電話越しに聞こえた嶺一郎の口振りには、重苦しいものが絡みついていていた。

（きつとこれは、主導権争いなだね。何を確保すれば主導権が握れるかも分からないまま、互いに時間の潰し合いをしている。開戦前、最後の夜になるかも。）

答えの出ないことを考えるのは、学者にでも任せればいい。

むしろほほえみを浮かべて、青木はるみは嶺一郎の部屋のドアをそつと開けた。

時田治樹が、結城舞のサポートによってセンターのサーバー上に「情報漏れエリア」を意図的に設定してもらったのが木曜日の昼近く、そして、その日の昼過ぎには、今回の作戦対象となっている劉蓉が触れる可能性のある端末とサーバーのうちの一つから、そのエリアにアクセスがあった。そこにあった情報は、都内にセンター保有のサーバーハウスを増設したという議事録風のファイルと、費目の伏せられた予算関係の議事録、あとは、都内の重要な宗教施設のリフトといったものであった。

センターは確かに、セーフハウスは複数保有しているが、その設置に予算的な審議は必要ではない。幹部クラスの誰かが領けばよいし、幹部どうしの監視と牽制で、不正な資金移動は厳格に封じられていた。だから、これらのファイルはただ餌として機能させるために、多少手の込んだフェイクのドキュメントを複数作った、というだけのことだ。

「お客さんが毒団子をお持ち帰りになったのは確実だけど、作戦に乗ってくれるかどうかはこれからだねえ。」

隣でモニターを覗き込む森田に向かって、時田は言った。

「例のマンションは？」

「ばつちり張ってますよ。劉蓉本人はこの時間帯、大使館内のはずだから、今この端末からアクセスしてるのは式神、じゃなかったカライズのはずだ。情報の裏を取りに、そろそろお出かけるかもしれないな。」

両手を頭の後ろに当て、背もたれに凭れながら、時田は少し考えた。

「こつちも、行ってみようか。」

「賛成だ。鉢合わせは、避けたいところだがな。」

森田はそう応え、すぐさま、重たそうな鞆を担ぎ上げた。時田の先になってオフィスを出る。行き先は毒団子、つまりダミーのセーフハウスがある江東区の臨海部、小ささまざまな倉庫が建ち並ぶ辺りだ。

車を止めてあるビル裏手の駐車場に歩く間に、時田の携帯電話にマンションを監視しているスタッフからの連絡があった。

「了解。二人現場に残して、君と後もう一人、そうだね実花さんと組んで追跡してみてくれる？ 失尾してもいいけど、だいたいの方角までは押さえて。うん。よろしく。」

カラース、行動開始か、と心の中でつぶやいた森田は、一つ軽く息を吐いた後、愛車のエンジンを始動した。少し遅れて助手席に乗り込んだ時田に尋ねる。

「そう言えば、シルバーのセフティ・スラッグはどうなってる？」

「試作品なら二、三日で作れるが、実戦に必要な弾数だと納品まで四日、弾丸の種類を増やせばさらに日は延びるとさ。ひとまず教誨師ちゃんのMP5用の9mm弾からお願いしてあるけど。」

それを聞いた森田は、若干眉を寄せた。

「そうか。……今回の敵、対応は早いようだが、間に合うだろうか。」

「無理ってことになるね、今週中だと。」

「……せめて、カラースの封印の在処が分かればな。」

「封印ね。九条の式神ちゃんたちは、脚だったっけ。」

「少なくともこの夏は、な。……」

森田の微妙な言いよどみに、時田が自然と反応する。

「なんだ？」

「封印は、術者がいれば動かせるらしい。直接聞いた訳じゃないが、そうしたものを讀んだ記憶がある。」

「そりやまた。どこで？」

「イギリス時代さ。ああ見えてもあの国はオカルトにうるさいんだ。ただ今回、敵の司令塔のプロファイルは「靈能的なスキルとしては一般の人間並みの可能性が高い」らしいからな。術者当人がどうかは分からない。」

「そうだね。術の類は使わず、サブマシンガンで退路を切り拓いたって話だからね。」

「ああ。だから、九条と式神たちの相手をしようと考えてるよりは、攻略の糸口は多いはずだ。」

「そうだね。今回は、指揮系統から潰すってセオリーがいいだろうね。」

「……まあそれは、劉蓉当人が出てくればの話だけだな。」

やがて車は、臨海部の倉庫地帯の狭い路地に静かに停止した。ダムーとして設置されたセーフハウスまではまだいくらかの距離を残していたが、カラーズの偵察部隊が来ると分かっている、わざわざ鉢合わせするほどの準備はない。むしろ、偵察部隊が引き上げてからの対策のため、二人はここに来ていた。

カラーズを尾行したセンターのスタッフの話では、カラーズは人目を避けず堂々と、ただし二グループに分かれて電車で移動していったらしい。見た目は人間の少女だから、一般人を装

つての移動も可能だ。しかも、制服を着て移動すれば、繁華街等では問題となるかもしれないが、電車ではそう目立たない。班別行動中の修学旅行の生徒など、制服を着た十代の人間は、都内ではいくらでもうろついている。

ダミーのセーフハウスには、尾行担当の班とは別の班が待機していた。完全な空き家よりは、人の気配があった方が餌として機能しやすいという判断だが、もちろんそこで即開戦となれば、時田も森田も側面から支援に入る。二人が待機しているのは、そうした状況を総て計算しての位置だった。

「おい、」

「見えてるさ。この辺り、人通りがないからな。いいようにモノノケスペース大公開だ。うっかり誰かに見られても、その場で狩ればいいということかもしれない。」

即座に時田は、セーフハウス内の人員に警戒の指示を出す。今日のところは、攻撃されない限りは待機、というのがこちらのプランだ。というよりも、攻撃されてもこの配置では間に合わない。敵の中心人物を欠いての開戦の確率は低いものの、実際には開戦しないことを祈るような状態だった。

「しかし跳ぶなあ。交戦時は要注意だ。」

緊張の中、時田がつぶやくように言った。

「持ち物は報告通り、通学用のありきたりのバッグのみだったが、サブマシンガンくらいなら

収まるサイズだ。揺れ具合からすると、そこそこ重量もありそうだしな。」

森田が一瞬の光景から状況を確認する。

「全く、スクールバッグにサブマシンガンなんて、お宅のお嬢様限定の話だと思ってたのにね。」
「そうでもないさ。桜ヶ丘にもう一人いたくらいだ。ともかく、疑ってかかった方がいい。」

その頃、倉庫二階の事務所を装った、ダミーのセーフハウスでは、外階段を足音を忍ばせて上ってくるカラーズとの、息を殺したさぐり合いが行われていた。シルバーで抑止はできるが、体内に弾丸が残らない限りやがて再生される。昨日明らかになったその事実はずでに、センター全員の知る情報であった。だから今開戦するのは、勝ち目のない戦いに飛び込むのに近い。痺れる数瞬が過ぎ、センター側の予測通りカラーズがセーフハウスのドア前から撤収したときには、ドア直近で警戒していた者も、カラーズ接近に気づいていない振りをするために雑談しつつ室内を片づけていた者も、思わず深い息を吐いた。

「了解。お疲れさん。そのまま待機よろしく。こちらはカラーズの離脱を確認後、周囲の検討に入るから。」

時田はそう告げると、ふだんはあまり持ち歩かない拳銃を確認した。

「スナイプポイントを探そう。今回の物件は時間がなくて、周囲の検証が終わっていない。」
「ああ。」

セーフハウス内を狙撃できるポイントは、すべて押さえておかねばならない。相手は少なく

とも七名おり、狙撃班と現場突入班に分かれる可能性はある。しかも、通常の鉛玉をばらまいて死傷者が出るのは主にセンター側だ。カライズ側は、劉蓉一人を守れば、後は捨て身の作戦でも勝算が生じる。

幸いにして近距離での狙撃ポイントは少なく、「陣取り」に割くべき人間も予定の範囲内に収まりそうだ。ただし、倉庫やコンテナヤードの先、運河を挟んだ対岸となる埋め立て地からの狙撃の可能性はあった。

「連中に、中長距離のスナイプはあると思うか？」

辺りを見回しながら、時田が訊く。

「分からない。記念公園では警備課が全ポイントを潰していたからな。……状況が許せば長距離スナイプもあったのか、それとも最初からその線はなかったのか。少なくとも、夏までのカライズのトレーニングメニューに、それはなかった。今参考になるのはそれくらいだ。」

「どうする？」

倉庫を背に、運河の方向を眺める森田に、時田がさらに尋ねる。

「七〇〇メートル前後の位置に二カ所、狙撃班を置く。位置取りは、ダミーはもちろん、近距離狙撃ポイントの大半が射界に入る位置、つまり、」

森田はそう言い差して、右手を挙げて前方の左右二カ所を指さした。

「プロなら絶対に警戒する位置だ。もしカライズがそのポイントにスナイパーを置くなら、現

場から離れた位置に戦力の一部を引きつけられる。もしカライズがあポイントを見落とすか無視するなら、こちらがスナイプするまでだ。向こうの、千葉側の建物の方にはオレが行ってもいい。反対側は、間に合えば公安の綾川に依頼する。それぞれ、接近戦および一般人対策のサポートスタッフが必要だが。」

「なるほどね。了解だ。後は、セーフハウス内の近接戦のメンバーだけだ。」

「仮にカライズが狙撃を考慮せず、全勢力を毒団子に差し向けたとすると、チーム・チャプレンとそのサポートのセンター実行部隊だけじゃ厳しいな。公安の応援を待つ間に制圧される。」

「いずれにしても、綾川氏にはあらかじめご相談しておきたい案件だね。」

「そうだな。繋ぎ、頼めるか？」

森田は現在は、センターの一員だ。教誨師やチーム・チャプレンを護る立場で発言するのは、筋が違うと言えば違う。森田の発言も、だから、一応は作戦遂行上の必要性からのものだ。しかし、古い付き合いの時田と森田の間には、そうした気遣いは要らなかったのかもしれない。

時田は無邪気な笑みを浮かべて、答えた。

「もちろん。そのためのセンター時田君ですよ。」

「それじゃ、移動しながら繋ぎを取ってもらおうか。狙撃ポイントまで車で移動する。」

「そうだね。直線距離は短いけど、移動はやっぱりいいだね。」

「ああ、運河を渡るから……。本番も、早めに準備をしておかないといけなくなりそうだ。」

二人は、車を止めた場所まで戻るべく、踵を返した。

その夜、大使館から帰宅した劉蓉は、カラーズからの報告を受けつつ、センターのサーバーから取り出したといういくつかのファイルを眺めていた。

「くくく。連中、間抜けなのか、小賢しいのか。いずれにしても、私たちのやることは同じよ。畏でも何でも、潰してやるわ。妹たち、今度しくじったら、全員バラすからね。父さんがなんと言っても。」

六人のカラーズたちは、しかし、劉蓉の言葉に怯えた様子も見せず、笑っていた。前日、水曜日の痛々しくも憔悴しきった少女達とは、別の人格のようでもあった。カラーズは、戦闘狂の方向付けが強くなされている。バトルが近いと聞けば、当然興奮も高まる。そして何より、これは自分たちを劉親子に認めてもらうチャンスなのだ。

「さて。放浪中のお父様はどちらかしらね。」

「ぱき」と携帯電話を開けてメールを一通送る。程なくして返信があった。

「あはは。もう日本に上陸してるって。それじゃ、明日にも中心のアジトを一つ潰して、お父様歓迎のプレゼントとしましょう。」

そう言いつつ、劉蓉は、待ち合わせ場所を父親、劉黄綺に伝えた。場所は当然、センターの

セーフハウスがあるという、江東区の臨海部だった。

「お嬢様、いまどちらですか？」

屋敷の最寄り駅となる地下鉄のホームを歩く相馬ひなの携帯電話に、青木はるみから着信があった。外出中はまずメールで連絡を入れるのがふつうだったから、これは緊急の連絡なのだろうと思いつつも、受け答えはいつも通りだ。

「地下鉄降りたところよ、紗幸さんも一緒。」

「承知いたしました。いつものA5出口でお待ちください。」

「ひよつとしてもう？まだ金曜日じゃないの。」

さすがにひなの足が止まる。一緒にいる吉田紗幸も、聞き耳を立てる表情になるが、駅の喧噪に紛れて聞き取れない。ただ、ひなの発言から、だいたいのは分かる。

「ええ。センターのサーバを叩いてきた連中が、先ほど行動を開始したらしいのです。」

「了解。予想より早かったわね。」

紗幸が、ひなの袖を軽く引つ張り、耳元で何事かを囁いた。

「あ、え、ちよつと待って。紗幸ちゃんが、例のアイテムはまだかつて。」

「昨日の今日ですから、さすがにそちらはまだのようです。今のところ、連絡はありません。」

「……わかったわ。ともかく出口で待ってる。大小をよろしく。」

通話を終えた携帯電話を手にしたまま、ひなは少し俯いた。再び歩き出してはいたが、どうしてもその歩みが遅くなる。

「どうしたの？」

紗幸が尋ねる。

「……あたし、これまで怖いつて思ったこと、なかったのかも。」

「それは、ケイさんのサポートがあったから？」

「違うの。……ううん、そうだね。違わないのかもしれない。今までは、周りの大人が用意した戦場で戦ってたってことかな。ベストを尽くせば生き残れる、何となくだけど、その最後の保証だけはあるように感じてた。」

「そっか。そうだね。それは、わたしも同じかな。」

紗幸が、左隣を歩く、自分より少し背の低いひなの顔を覗き込むようにして、にっこりと微笑んだ。

「わたしたちみたいなの仕事って、実は命のやりとりなんてしないもの。そんな場面、何かのミスでしか陥らない。」

すれ違う人の多い駅構内を歩きつつ、言葉を選びながら二人は会話を続ける。

「そうなのよね。圧倒的な優位性がなけりゃ、仕事としてはこなせないものね。それが今回、

かなりアドリブ指示あるでしょう？読み切れない要素も大きいし。しかも、さすがの教誨師様も経験の少ない、モノノケ姫相手だからね。……できれば、神社本庁の人とか、九条さんの指示の下で、兵隊としてやりたかったな。」

弱気な教誨師を前に、紗幸は少しだけいたずらをしたくなった。

「ねえ、目をつぶって？」

並んで歩きながら、紗幸はひなに言った。

「え、やだ。何となくだけど、キスとかされそうかも」

「の」と言う前にキスされていた。こんな人目の多いところで、と呆然とひなが立ち尽くすと、何事もなかったように、紗幸は長い髪を揺らしつつくりと背を向けた。そして、地上へ向かう階段を、一人で上がり始めた。

「もう、いきなり何するのよ！」

慌てて小走りに駆けよったひなが、低く押さえた声で抗議すると、階段の途中で歩みを止めた紗幸は言った。

「わたしだから弱音吐いてくれるのかなと思って。」

「そ、それはそうだけども。」

それほど幅のない階段で横に並ぶわけにもいかず、ひなは背の高い紗幸の背中に向かって、階段の二段下からそう答えた。

「なら言うけど。……どんなに凄い人でも、戦場にいない人は援護してくれないんだよ？」
わずかに顔を横に向けて、視線だけをひなの方に送るようにしつつ、紗幸はそう言った。

「……ごめん、そうだね。切り替えていかなくちゃ。」

「うん。」

「ありがとう。」

振り向いてくれない背中に向かって礼を言うと、

「わたし、あなたともっとずっと一緒にいたいから。」

紗幸はそう、はっきりした口調で言った。それは、何があっても二人で生き延びていくという、強い意志表示だ。

「紗幸ちゃん」

二人の会話はそこで終わった。地上へ出れば、戦場が待っているはずだった。